

委託事業実施内容報告書

平成 22 年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 特定非営利活動法人
中学・高校生の日本語支援を考える会

1 事業の趣旨・目的

地域の外国人に日本語学習や生活の支援を行っている人材が、多文化共生を念頭においた今日的課題に対応すべく、多様な人的リソースをコーディネートする方法や、様々な組織・機関と連携協働する知識や技術を学んで、実践していける人材を養成する。

2 企画委員会の開催について

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
6月5日	地球市民かな がわプラザ あーすぷらざ	丸谷士都子 崔英善 坂内泰子 樋口万喜子	・講座日程とシラバス ・受講者の条件の検討 ・受講生募集から開講ま でのスケジュール	講座日程とシラバスの内容確 認、受講生の募集方法・受講条 件の確認、開講までの予定、 スタッフの役割分担
11月6日	神奈川県民 サポートセン ター	丸谷士都子 崔英善 坂内泰子 樋口万喜子 山縣紀子	・「日本語フォーラム」 への参加とその意義 ・課題の共有化と解決へ の道筋 ・修了要件の検討	・「日本語フォーラム」に参加 し、実践的に学ぶ意義の確認 ・設定した課題の解決に向け て、研修内容を生かす振り返 り方法 ・修了要件と証書の作成
11月20日	神奈川県民 サポートセン ター	丸谷士都子 崔英善 樋口万喜子 山縣紀子	・講座全体についての 評価、 ・事業報告の方法と今後 の課題について ・経費確認	受講者のアンケートをもとに、 講座を評価する。 今後の課題、

3 養成講座の内容について

(1) 養成講座名

「外国人と地域をつなぐ日本語コーディネーター養成講座」

(2) 養成講座の目標

研究者から専門的な知識を学ぶだけでなく、地域でコーディネートを実践し、高い評価を得ているいくつかのNPO代表を講師として迎え、ワークショップを行い、実践的な力をつける研修を提供する。また、企業のCSR担当者やブラジル人学校長、国際理解教育のファシリテータ、さらに自治体の相談窓口の通訳として多彩な働きをする難民出身者からも、それぞれの立場でのコーディネートの必要と実践を学び、多角的な視点を有する人材を養成すること。

(3) 受講者の総数 36 人 (国籍別内訳 日本人 33 人, 中国 1 人)

(4) 開催時間数(回数) 43 時間 (14 回)

(5) 参加対象者の要件

原則として日本語を2年以上教えている者。外国人相談窓口や職場で外国人の日本語学習などの相談を受けている者。学校で外国につながる子どもと接している者。日本語教育コーディネーター。

(6) 受講者の募集方法

- ・ 「かながわ多文化子ども支援ML」(財団法人かながわ国際交流財団 多文化共生・協働推進課)、
「kodomo-ml」(中国帰国者定着促進センター 教務部)、「Yokohamakokusai」(横浜市外国人教育連絡協議会:横浜市立の小中学校の国際教室担当者が中心メンバー)などのメーリングリストで受講生募集のメールを流す。
- ・ 地域のセンターに受講生募集のチラシ(別紙参照)を置かせてもらう。
- ・ ホームページに募集記事を載せ、ホームページからも応募可能にする。

(7) 研修会場

かながわ県民センター

〒221-0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2 電話 045-312-1121(代)

(8) 使用した教材・リソース

「多言語社会と外国人の学習支援」

「日本語教育は何を目指すか」

「ボランティアコーディネーター白書 2007-2009 年版」

「教師とコーディネーターのための日本語プログラム運営の手引き」

「チームビルディング -人と人をつなぐ技法」

(9) 講座内容

回	日時	講座名/学習内容	講師	受講者数
1	8月21日 9:30~12:40	多文化共生社会の理念にもとづく地域日本語支援	多文化社会コーディネーター 樋口 万喜子	28名

		CSRと社会貢献活動—三井物産のブラジル人児童支援を例として—	三井物産株式会社 CSR 推進部 社会貢献推進室 柴崎敏男	
2	8月28日 9:30~12:40	国際協力の現場から考える多文化共生—受け入れ側の学び—	MPO 法人地球の木 丸谷 士都子	22名
3	9月4日 9:30~12:40	地域で支える外国人の子どもの日本語学習	横浜国立大学 教育人間学部 西川朋美	29名
		生活者としての成人外国人の日本語教材	横浜国立大学留学生センター 樋口 万喜子	
4	9月11日 9:30~12:40	コーディネーターに求められる知識と能力	海外技術者研修協会日本語教育センター 春原 憲一郎	25名
5	9月18日 9:30~12:40	不登校、不就学の子どものサポート—「虹の架け橋教室」から学ぶコーディネーターカー	NPO 法人 ABC ジャパン 富本 潤子	25名
6	9月23日 11:30~14:30	「日本語を母語としない親子のための高校進学ガイダンス」(見学)	Me-net 多文化教育コーディネーター 山縣 紀子	22名
7	10月2日 9:30~12:40	地域で考える「日本人と結婚した外国人女性のくらし・ことば・子育て」	神奈川大学 富谷 玲子	22名
8	10月9日 9:30~12:40	神奈川県ブラジル人学校の現状と課題—さくら教室の日本語ボランティア活動	さくら教室日本語支援コーディネーター 中沢 英利子	22名
		日系ブラジル人支援の現場で—相談窓口&通訳をする中で感じる「統計には表れない現実」—	ポルトガル語通訳 岩本 弥生	
9	10月16日 9:30~12:40	インドシナ難民の現状と課題—地域のコーディネーターに望む者—	横浜市泉区役所 外国人相談窓口 ベトナム語通訳 トルオン ティトウイ チャン	23名
10	10月23日 9:30~12:40	異文化間コミュニケーション理論と実践	法政大学 キャリアデザイン学部 山田 泉 上智短期大学サービスラーニングセンター 河北 祐子	22名
11	10月30日 9:30~12:40	かながわ外国人すまいサポートセンターの実践から見えてきたもの	NPO 法人かながわ外国人すまいサポートセンター 裴 安	21名
12	11月6日 9:30~12:40	行政との協働について—NPO 法人 愛伝舎の取組み—	NPO 法人 愛伝舎 坂本 久海子	22名

13	11月14日 13:00~:17:00	「生活者としての外国人」の日本語学習環境について考える—「日本語フォーラム2010in 神奈川—(参加)	NPO 法人中学高校生の日本語支援を考える会 古屋 恵子	23名
14	11月20日 9:30~12:40	今、ここにあるものから—連携と協働—	神奈川県立外語短期大学 坂内 泰子	24名

(10) 講座の評価

①受講生に対するアンケート

- 地域日本語支援においては、コーディネーターの存在(能力、役割)次第で充実した支援が出来るか否かにわかれると思う。この講座を通して、コーディネーターとして身につけるべき①知識②スキル③コーディネーション力の習得をしたいと思う。その3つへの力と、講師の語る愛情とに共感した。
- 母語保持やアイデンティティについて、これまで考えてこなかった視点からお話がきけ、良かった。日本語教室に来る生徒に対して「日本になじむことができるように」ということを念頭においてしまっていたが、生徒には母語を話し自分の出自を知り、歴史を学んでいく権利があるのだと考えさせられた。また「ハートで向かっていく」ということが本当に大切なことなのだと思う。
- 私はこのごろ「外国籍の人に教える・支援する」のではなく、外国籍の人と日本人と変わらずに付き合い、彼等からも何かが学べたらと思うようになった。ペルーの婦人にフォルクローレの踊りを我々フォルクローレ愛好グループに教えてもらうことになったところ、彼女は今までと違ってとても生き生きと付き合い合うようになった。このことに何かヒントがあると思う。
- 私たちの活動は助成金によって支えられている面がある。企業からの支援は大きな力になっている。それと共に、活動を広げ情報のネットワークをしっかりとするためには「行政」との連携が欠かせないと思う。しかし、学校という組織・教育委員会・担当の役所・国際交流協会は極めて閉鎖的であり、なかなか連携が取りづらいのが現状である。行政にどうアプローチするのか、この講座からヒントが得られたように思う。
- ボランティア団体は、ともすればミッションを追うことに熱中し、自分達の活動ばかりに目を向け、自己満足に陥りがちだが、時には第三者を交えて評価を行ったり、会員同士が立ち止まって考える時も必要だと思った。また、いったん活動を始めるとグループの固定化が進み、外部から途中入会が難しいなど、閉鎖性を持つことも多くある。常に新陳代謝をはかり、多くの年齢層が関わることにより、自由な発想が生まれると思った。
- 単なる一人のボランティアとして行政に対する不満は感じていても、それを他に発信したり、地域の他団体との連携したりすることなどはあまり考えて来なかったことを反省している。
- コーディネーターとして行政と関わるためには自分たちの殻の中に閉じこもらず、議員の力を借りるな

どして行政に積極的に働き掛けることが大切だということを認識した。その時には「理想の空論を掲げるよりも実践可能な具体的な提言がより効果的」とのお話も現実的で参考になった。

- 全体を通して、本当に有意義な講座に通うことができ良かったと思っている。様々な立場・背景をもった方のお話を聞いたり、またグループワークなどを通して“こんな意見をもった人もいるんだ”と実感したりした。私自身の経験は浅い中で、様々なことを学ぶことができた。これからはこの講座の経験を生かし、柔軟な思考をもち、さらに行動へとつなげていきたいと思っている。
- 外国籍住民数などに関する統計に、今一度あたってみること、また行政の施策を知ること、などの大切さに気づいた。
- この講座がきっかけとなり、他地域の日本語教室と連携し研修会を開いたことなど、いい出会いができたと思った。日本語教室ではない地域のサークルと協力してイベントを開くなどして、お互いの活動を知ること、外国につながる人たちと地域を結ぶという点でも有意義なことだと思った。
- 相手に対した期待する前に、相手に期待する内容を具体的に示し、相手が動きやすい様に数値を伴う資料等を提供する事が必要という指摘はなるほどと思った。また、それにかかわる行政は一機関だけではないという事実を認識して動くことも重要であると良く分かった。
- 私たちの活動は行政を動かしていかなければならないが、そのために他のボランティア組織などがどのような活動をしているかをまず知る事、そしてその中から自分の組織にマッチする方策を見出す事が大切である事を勉強する事が出来た。有意義なセミナーであり感謝したい。
- 外国人を受け入れる環境として、横浜は常に先進的な取組をしており、充実した体制が整っていると思っていた。しかし、ここに至るまでに、想像していた以上の苦労があったことや、現在も多くの課題が山積していることを改めて教えて頂いたような気がしている。現場で活動されている方々、難民の方等、生の声を伺えたのも、自身のそれまでの見識の浅さを知るきっかけとなったように思う。また、熱心に動かれている企画者側のスタッフや、企画団体が築いてこられたネットワークの存在を通し、横浜の外国人問題解決の牽引力は、このような陰の労苦をいとわない方々の存在だと思っている。私の地元は、散在地域で、目に見える外国人問題が多く発生しているわけではない。しかし、将来を見据えた時に、必ず必要な時代が来ると考えているし、多文化共生という視点がより良い地域作りにつながると考えている。今回学んだことが今後良い形で還元できるよう、今後も学び続けていきたいと思う。(このコメントについては、一部、省略)

②実施主体からの研修内容結果評価

・受講生は地域で中心的にボランティア活動をしている方や、区の多文化共生라운ジの担当者、学生による学習支援ボランティアグループのリーダー、これから地域で活動を始めようとする退職教員など多様な方々が集まった。皆高い問題意識を持って熱心に聴講し、かつ積極的にワークショップに取り組んでいた。

・単発的ではあるが、千葉県・愛知県・山梨県・埼玉県からも、国際交流協会の推進員、ブラジル人学校支援者(社会人学生)、国際教室の教員が、それぞれの支援の立場で直面した課題解決の糸口をつかもうと、聴講を申し込んできた。このことから、今回の講座のテーマ設定が、外国人問題をめぐるニーズに応えようとする適切なものであると評価されたことが分かる。

・本講座で知り合った受講生(隣の市)同士で、新しい視点をもって「対話活動を中心とするボランティア研修」を企画し、受講生も共同で集め、実施した。受講生が講座参加によって得たネットワークを活かして、企画を実践に移す足がかりを提供したと言える。このことは、本講座が、今後も発展的に多文化共生の理念を広げていく発信源となれたと評価できるだろう。

③実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

今後は、構築されたネットワークを活かして、お互いの日本語支援活動の情報を交換、検討する場や機会を設けたい。特に、子どもの学習支援では、神奈川最大の支援組織「多文化共生教育ネットワークかながわ」や、横浜市内のボランティアネットワークの「横浜多文化教育ネット」と連携し、複数の手と目で支援する体制をとっていきたい。

(11) 事業の成果

①他事業との連携

当NPOが主管団体となり、「日本語フォーラム 2010 in 神奈川」を行い、地域で活躍する外国人コーディネーター4人をパネリストに迎えパネルディスカッションを行った。沖縄、富山、大阪からの参加もあり、100名近くが、三分科会に分かれて、日本語学習の公的保障や子どもの教育について話し合ったが、受講生はここにも実習として参加し、意見を述べ、その後、レポートを書いた。パネリストも司会者も、本講座の講師や運営委員に迎えた方がほとんどであったので、他団体と連携することや、地域にとどまらず全国的な市民活動として広げていくことの重要性を、身をもって認識できた。

②研修後の人材活用

講座期間中に開設された市の多文化共生ラウンジや、来春開設する県の日本語教育支援機関の職員が、本講座で学んでいたことは、外の受講生にも良い刺激となった。この講座を受講することによって得られた知識や技術、そしてネットワークをそれぞれの現場で活かせるよう、また、新たな活動の場や機会が得られるよう支援していきたい。

(12) 今後の課題

現代社会がもつ様々な問題(格差や差別)は、そのまま地域の外国人にもより重い負担となって、投げかけられている。このような状況で問題解決にあたるには、情報の共有化や定期的な研修によって、その対応策を複眼的に考えていかなければならない。多文化社会のコーディネーターは、地域の一住民の視点から外国人を地域や行政機関とつないで、より住みやすい地域を作ろうと活動していく。その一方で、行政の窓口となる人間もまた、今あるものでよしとせず、研修によって、その連携を積極的に推進していく姿勢と、技術を磨いていく姿勢が求められる。